

# 道徳科を要としたカリキュラム・マネジメントの推進に関する実践研究 — 小単元構想を中心として —

山田 貞二

愛知県一宮市立浅井中学校

Practice research on curriculum management that incorporates  
moral education as the core :  
Focusing on the concept of small units

Teiji YAMADA

キーワード：小単元構想 一枚ポートフォリオ メンター リレー・ローテーション道徳

## I. 実践研究の背景と目的（はじめに）

一昨年度（令和元年度）より小学校、昨年度より中学校において「特別の教科 道徳」が全面実施され、学校現場では道徳科に対する研究や実践が確実に進んでいる。そして、本年度は小学校、令和3年度には中学校において新学習指導要領が全面実施され、全教科において新しい教育が展開されることとなる。道徳科の取組は、それら他教科に先行して実施されているが、それは道徳科の授業の質的転換が他教科の授業改善に大きくつながっていくからであり、そこに先行実施の大きな意義がある。特に、カリキュラム・マネジメントとの関わりにおいて、研究や実践を進めていかななくてはならない。しかし、学校現場においては、どうしても道徳科の指導法の実践や研究が優先する傾向にあり、マクロ的な視点での研究や実践が後追いになりがちである。

道徳教育自体が学校教育全体で行うべきものであり、道徳科がその「要」であることを考えたとき、カリキュラム・マネジメントと学校全体の道徳教育、そして道徳科の授業との関わりについての研究や実践がもっと進んでいかななくてはならない。学校経営という視点から道徳教育や道徳科の授業をみていかなければ、「特別の教科」という道徳科の特質が失われてしまうことになりかねないからである。つまり、道徳科の授業だけでなく学校全体の道徳教育を全教職員でマネジメントすることが求められている。実際、学校現場では、「カリキュラム・マネジメント」という言葉は知っているものの、それは管理職が行うもので、自分には関係ないものであるという認識の教員も多くいるのも事実である。

そこで、本校では、平成29年度より道徳科を核にした小単元構想をもとにしたカリキュラム・マネジメントを進め、生徒探究型の授業展開をめざすとともに、主体的・対話的で深い学びを実現すべく、3年間の教育実践を進めた。全教職員が関わり、学校全体で取り組むカリキュラム・マネジメントの研究と実践が生徒の学びのスタイルを変え、教員の意識を大きく変えるきっかけとなることへの大きな期待も含めての実践研究である。

## II. 実践研究の方法と仮説

### 1. 研究の進め方

本実践研究は、一宮市立浅井中学校全生徒（約600名）を対象として平成29年4月より令和元年3月末日までの3年間にわたって研究を進め、生徒のポートフォリオやワークシート等の記述およびカリキュラムマネジメントチェックリスト<sup>1)</sup>と学校評価アンケート調査（全生徒及び全保護者、全教職員）の結果をもとにして、分析と考察を行う。また、令和元年10月11日（金）に開催の愛知県道徳教育研究大会参加者約400名の教育関係者の感想や意見および本校学校運営協議会委員（8名）の指導、助言も分析や考察の資料とする。

## 2. 研究の仮説

- (1) 学校の教育目標に沿って、学期ごとに道德教育に関わるテーマをもち、そのテーマに沿った道德科を「要」とする総合単元的小単元を中心とした道德教育を進めることにより、教科横断的な視点から捉えたカリキュラム・マネジメントが大きく推進されるであろう。
- (2) 小単元構想の総合単元的な道德にリンクした「一枚ポートフォリオ評価」による評価活動と「リレー・ローテーション道德」による授業改善を行うことによって、PDCA サイクルの確立の視点からのカリキュラム・マネジメントが大いに推進されるであろう。
- (3) 明確な指導観を基にした教材の活用類型を基にして、授業展開の中に質の高い指導法をはじめ、ファシリテーションやゲスト道德、p4cなどの探究活動を取り入れることにより、型にはまらない「しなやかな道德授業」が実現し、児童生徒個々の納得解を追究する姿勢が育つであろう。
- (4) 学校が道德科の目標や授業についての積極的な発信活動やゲスト道德をはじめとする人的な活用をすることにより、道德科に対する保護者や地域の理解が深まり、連携した取組が可能になるとともに、外部の人的資源の活用の視点からのカリキュラム・マネジメント推進の土台作りが推進されるであろう。

## 3. 研究の重点

- (1) 「いのち」の授業を中心とした小単元構想の道德授業の推進  
学期ごとに各教科、領域、学校行事とも関連させた総合単元的な道德小単元を構想することによるカリキュラム・マネジメント3つの視点の活性化
- (2) 道德教育、生徒指導、特別活動の三つの活動の連携（三本の矢）
- (3) しなやかな授業展開とリレー・ローテーション道德の導入  
メンター制による教材研究と明確な指導観に基づいた多様な指導展開と発問の工夫による授業改善の推進
- (4) 探究型道德授業への転換とファシリテーションを導入した『対話』の創造
- (5) ピア・サポート活動による安心感（セイフティ）の創造
- (6) 一枚ポートフォリオを中心とした評価の導入によるPDCA サイクルの活性化
- (7) 学校ホームページや道德通信、学習会、保護者の授業参加等を通しての外部連携の推進

## II. 実践内容詳細

### 1. 『利他共生』という教育目標からのスタート

#### (1) 中期的教育目標の設定

「カリキュラムマネジメントの目的は、各学校の『ア・教育目標の具現化』です。学校のミッション（使命）は、各家庭・地域から預かる子どもたちを、よりよく成長させることです。どのような教育的成長をめざすのか、法令や学習指導要領、子どもや学校、地域の実態を踏まえ、学校としての教育目標を設定します」<sup>2)</sup>と『カリキュラムマネジメント ハンドブック』の中で、カリキュラム・マネジメントにおける教育目標設定の重要性を田村知子氏が指摘をしている。

本校は、平成28年度に生徒の自死という大きな課題と向き合うことになった。「いのち」の大切さと豊かな人間関係の構築こそが、自校の課題であり、地域や保護者からの期待でもあった。これを受けて、全教職員に示した中期的な到達目標が『利他共生』という考え方である。「誰かのために自分を生かす」という“for you”の目標と「協働し助け合い共生を実現する」という“with you”の目標の二つであ

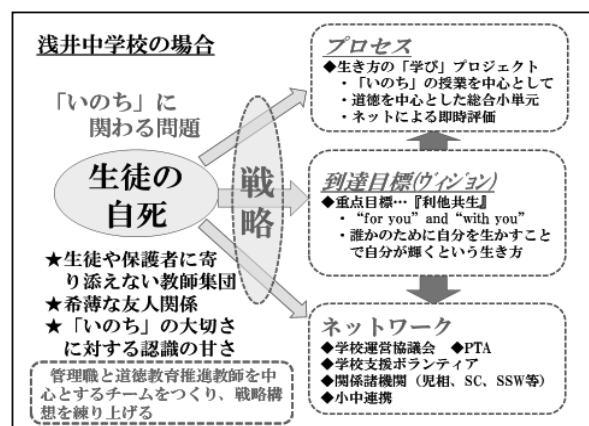


図1 浅井中学校戦略マップ

る。生徒が自他の「いのち」を大切にするために、この二つの目標はなくてはならないものと考え、教育活動全般において『利他共生』の実現を目指した。

### (2) 主たる内容項目の設定

先に示した中期的な教育目標を具現化していくためには、具体的な行動目標が必要となってくる。そこで、図1のような戦略マップのもと、教育学者・森信三氏の学校再建三原則を参考にして、「時を守り、場を清め、礼を尽くす」という三つの目標を全教職員、生徒、保護者、地域とともに共有した。

赤堀博行氏は、道徳教育におけるカリキュラム・マネジメントについて「具体的にはめざす子供像を基に設定した重点目標に含まれる道徳的価値を含んだ内容項目を精査することが求められる」<sup>3)</sup>と焦点化した目標設定の重要性を指摘している。この三つの行動は、他の行動に大きな影響を与えるものであり、この三つの行動目標を支えているのが、「B - 6 思いやり、感謝」という内容項目である。本校が目標とする主たる内容項目である。この一つの内容項目を重点目標とすることから、学校全体の道徳教育を進めることとした。この内容項目は、他の多くの内容項目と関連し合っているから、一つをめざすことで他の内容項目にも必ず広がりを見せていくと考えたのである。

### (3) 学校広報の切り札であるホームページの活用

校長は、その指導力を発揮し、学校の教育目標や道徳教育の基本的な方針を全教師に明確に示すことが必要である。目標が決まったら教職員はもとより、生徒、保護者、地域と共有することが大切である。集会での校長講話、地域でのあいさつ、学校便り等を通じて理解を図ることとした。当然のことではあるが、「校長室だより」は毎週の発行。しかし、紙ベースは、どうしても新鮮さがなくなる。そこで活用したのが学校ホームページ。学校広報の切り札といわれている学校ホームページの毎日更新により、校長の思いや学校経営や道徳教育でめざす生徒像を地域や保護者に発信している。図2のような「校長室より」のコーナーは、校長がその思いをタイムリーに語る大切なツールであり、毎日更新が読み手を引き付け、カリキュラム・マネジメントに対する理解促進にも大きな効果を発揮すると考えた。

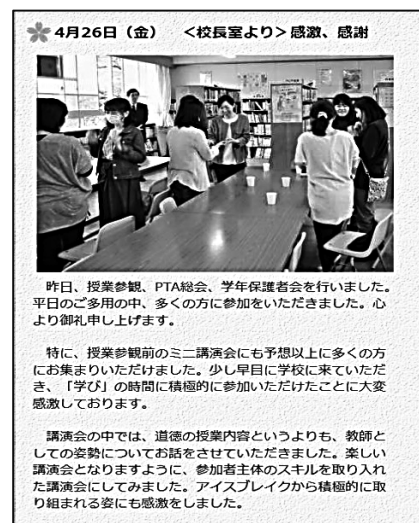


図2 学校HP「校長室より」

## 2. マネジメントを推進する組織づくり

道徳科の授業を要とする道徳教育では、全職教員が授業や単元等の改善活動を進めながら、学校の道徳教育目標の実現をめざしていくことが大切である。実際に道徳教育を推進していくのは、道徳推進教師となる。しかし、学校全体に関わる重要な役割全てを道徳推進教師一人でやり遂げることは不可能であり、管理職が道徳推進教師を要とする道徳教育の推進組織をマネジメントする必要がある。教職員全員を組織化して、全教職員がカリキュラム・マネジメントに関わる体制を構築するというのである。

そこで、本校では道徳推進教師のほかに「スモール推進教師」を配置し、校長の方針の下、道徳推進教師の具体的な業務を「スモール推進教師」が実行に移すシステムを構築した。図3が本校の道徳教育の推進組織図である。校長の方針の下に、研究推進部を置き、推進部は、各学年の研究組織と各部門の研究組織をまとめる。この推進部は学校の道徳教育の「要」であり、道徳推

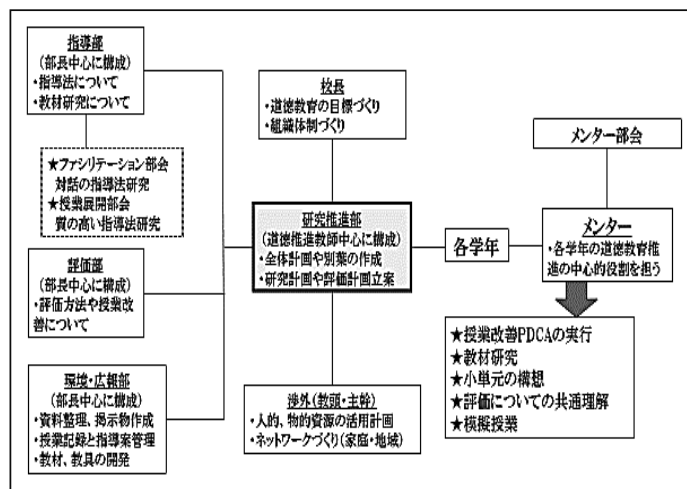


図3 マネジメント推進組織

進教師が責任者を務める。そして、この各部の部長と各学年のメンター（授業改善の中心的教師）をあわせて「スモール推進教師」と呼ぶこととした。

本校が特に重要視しているのがメンターの存在である。メンターとは、仕事上の指導者、助言者の意味で、学年の道徳科の授業改善の中心となる教師のことをさしている。マネジメントが着実に進行するためには、メンターが学年の授業改善を進めなくてはならない。指導法や評価、小単元の構想などについて学年の実情に応じて計画の立案と実行、改善を行うこととなる。このメンターを育てることができるとは、カリキュラム・マネジメントの大きなポイントと考えたのである。

### 3. 総合的な小単元の構想

#### (1) 小単元を構想する意義

では、いかにして全教職員が道徳科を「要」としたカリキュラム・マネジメントに関わっていくか。道徳科の授業を教科横断的に位置づけ、全教職員がPDCAサイクルにより、授業改善することこそがもっとも重要と考えられる。そこで、道徳科の授業を一単位時間の授業として捉えるのではなく、テーマ性を持った総合単元的な小単元の中の授業として位置付けることで、深い学びを実現するとともに、授業改善をスムーズに進めることとした。

図4のように、単元を貫く課題と育てたい資質を設定した後、道徳科の授業を数時間配列する。その中に各教科や領域を配列し、一つの単元をつくる。こうした小単元を学年や学校で組織的に行うことで、PDCAサイクルでの授業改善も組織的に行うことができる。課題やねらいもはっきりしているため、必然的に子どもたちの道徳性の成長も見取りやすくなる。

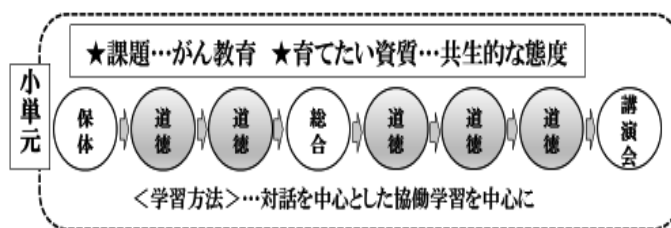


図4 総合的な小単元モデル

#### (2) 具体的な小単元構想の方法

まず、図5のように学校の重点目標を受けて、各学期の道徳教育の課題（テーマ）を設定することが不可欠である。そして、各学年で数時間の道徳授業を中心とした小単元を構想する。

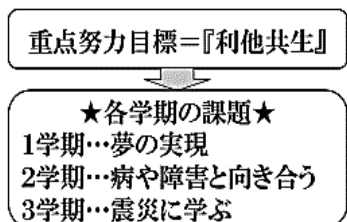


図5 学期ごとのテーマ

が必要となる。この総合的な小単元は、教科横断的になっているため、必然的に多面的・多角的なアプローチとなってくる。

本校では、学期に一つ小単元を構想し、生徒の道徳性の成長を一枚ポートフォリオで評価するとともに、学年のメンターを中心にして、授業改善を進めている。こうして全教職員が道徳科を「要」としたカリキュラム・マネジメントに関わるのである。

### 4. リレー・ローテーション道徳～PDCAサイクルの確立～

小単元構想の中の授業改善は、ローテーション道徳に、リレー道徳を加味したリレー・ローテーション道徳によって実施することでその実現をめざした。

図6の小単元例は、「がん教育」を課題として構想した際の単元である。他教科や領域と関連させながら、生徒に課題を解決させていく。8時間完了の単元の中に、映画鑑賞や講演会、ゲスト道徳、ピアサポート活動を挿入することにより、実感としての道徳授業を実現するとともに、育てたい資質である「共生的態度」を養うことが可能となる。道徳教育は、その目標である「道徳性を養う」ために、多面的・多角的なアプローチ

	教科等	教材名等	備考
第1時	保健体育	がんの基礎知識	養護教諭が準備
第2時	道徳	天使の舞い降りた朝	家族愛
第3時	道徳	自作教材	生命尊重
第4時	総合	映画鑑賞	がんを扱ったドキュメンタリー
第5時	道徳	ドナーカード	生命尊重
第6時	学級活動	ピアサポート	共感的関係作り
第7時	道徳	移植者の方とともに	学年道徳(ゲストティーチャー)
第8時	講演会	いのちの授業	小児がんの娘さんを亡くされた方が講師

図6 総合的な小単元例

(1) メンターを中心とした授業改善

授業改善は以下のような手順で各学年に配置されたメンターが中心となり毎週検討会議を開き、よりよい授業を創り上げていく。

- ① 学校の道徳教育目標の実現に向けて、学年の授業改善体制を構築する。
- ② 各学年を二つのチームに分け、授業改善のメンターを二人配置する。
- ③ 各学年のメンターを中心に総合的な小単元を構成する
- ④ 小単元にしながら「リレー・ローテーション道徳」を実施することにより授業改善を図る
- ⑤ 評価についても学年を一つのチームとして検討を進める

リレー・ローテーション道徳式授業改善法(2ブロックVer.)														
担任	ア		イ		ウ		エ		オ		カ			
学級	1組		2組		3組		4組		5組		6組			
	教材	指導者	教材	指導者	教材	指導者	教材	指導者	教材	指導者	教材	指導者		
	教材研究 検討会						指導法研究 指導案立案							
1週	A	ア	B	イ	C	ウ	D	エ	E	オ	F	カ	(リレー道徳) 教材が移動	
	検討会						検討会							
2週	B	ア	C	イ	A	ウ	E	エ	F	オ	D	カ		
	検討会						検討会							
3週	C	ア	A	イ	B	ウ	F	エ	D	オ	E	カ		
	学年検討会 教材研究 指導案修正													
4週	D	エ	E	オ	F	カ	A	ア	B	イ	C	ウ	(ローテーション道徳) 指導者が移動	
	検討会						検討会							
5週	E	オ	F	カ	D	エ	B	イ	C	ウ	A	ア		
	検討会						検討会							
6週	F	カ	D	エ	E	オ	C	ウ	A	ア	B	イ		
	学年検討会						最終指導案作成		記録整理・保存					

図7 リレー・ローテーション道徳展開図

(2) リレー・ローテーション道徳

リレー・ローテーション道徳については図7に示すように、6学級の学年の場合、前半の3時間は、教材をリレーすることにより、徐々に指導内容をよりよいものに改善し、後半の3時間は、一人の指導者がその教材を使って残りの3学級で授業を行うことにより、指導者自身の指導力を向上させる改善を図る授業改善システムである。当然のことながら、毎週1時間授業が終わるごとに、改善点をファイルに記入し、チームで改善に向けた検討会を持つ。したがって、この方式は何度も授業改善を重ねることにより、良質の授業を生徒に提供できるような教師の力を身につけさせる小単元構想にうまく適応したシステムともいえる。

【前半の3時間】リレー道徳方式

- ① 教材をリレーすることにより、徐々に指導内容をよりよいものに改善
- ② Aという教材を1組(アが指導)→3組(ウが指導)→2組(イが指導)という形でリレー
- ③ 1時間授業が終わるごとに改善点を検討して次の授業者へ渡す
- ④ ファイルを作成して引継ぎ

【後半の3時間】ローテーション道徳方式

- ① 一人の指導者がその教材を使って残りの3学級で授業を行うことにより、指導者自身の指導力の向上をねらいとした改善
- ② アの教師が4組→6組→5組で授業実践
- ③ 前半3時間で改善された良質の授業案により授業実践し、授業後には改善点を検討(主に週に一度の学年会を活用)

(3) 総合的な小単元構想におけるPDCAサイクル

道徳科を「要」とした総合的な小単元構想をリレー・ローテーション道徳方式によって展開することにより、図8で示すような道徳科の授業改善を中心とした授業改善をねらいとしたPDCAサイクルが

確立される。そして、このサイクルを基にして学校のカリキュラム・マネジメントが大きく動いていく。新学習指導要領の完全実施に先行して施行された道徳科の授業改善が、他教科でのカリキュラム・マネジメント実施のモデル教科となることは必然である。すでに理科や社会科において道徳の実践が活かされ始めている。尚、評価についての詳細は後述する。

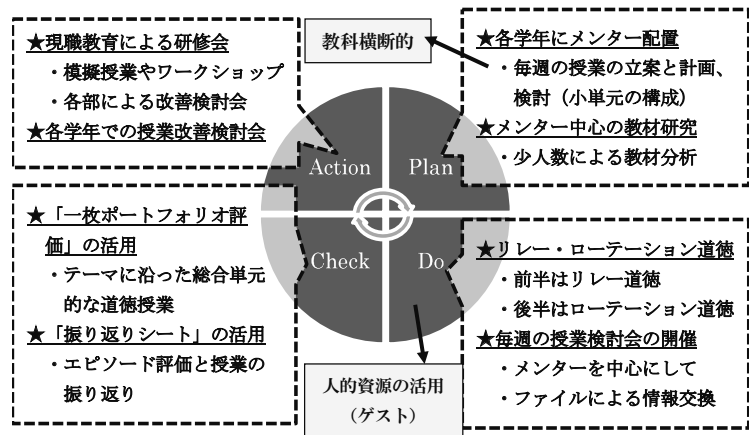


図8 道徳科を「要」とする小単元のPDCAサイクル

### 5. 生徒探究型の授業への転換～ファシリテーションの導入～

PDCAサイクルの確立は、確実に授業改善に結びついていくが、そのためには授業の質的転換に向けた具体的なスキルが必要となってくる。

そこで、道徳教育の大きなねらいの一つである主体的な判断力をつけ、生徒探究型の学習形態を確立するためにファシリテーションを導入し、生徒相互の考えを見える化するとともに、よりよい考えを求めて対話し議論できるようにした。

#### (1) ファシリテーションの導入

ファシリテーション (facilitation) とは、人々の活動が容易にできるよう支援し、うまくことが運ぶよう舵取りすることをさしている。集団による問題解決、アイデア創造、教育、学習等、あらゆる知識創造活動を支援し促進していく働きを意味している。その役割を担う者がファシリテーター (facilitator) であり、会議で言えば進行役にあたる。そうした進行役を育て、ペア学習や4人組の小集団学習を形式的ではない実質的で効果的な対話や議論に高めていく試みを実践した。

##### ① ブレインストーミング・KJ法

付箋紙に自分の考えを思いっただけ書き、それを模造紙等の上にはりつけていく。そして、同じ内容のものどうしを分類しタイトルを考えさせる。この活動をする中で、対話が自然と生まれ、解決に向けた話し合いが主体的に行われるようになる。

##### ② ミニホワイトボード・ミーティング

4人組の小集団に一枚のミニホワイトボードを配付し、話し合った内容をホワイトボードにまとめさせていく。その際、様々な思考ツールを活用することを指導し、思考の見える化と整理を行わせる。

##### ③ 思考ツール

自分たちの考えを見える化し、分かりやすく分類したり分析したりする方法。イメージマップやYチャート、Xチャート、フィッシュボーン、ベン図、クラゲチャートなど様々な方法があり、話し合いのテーマによって使い分けをするよう指導した。最初は戸惑っていたものの、すぐにその方法に慣れ、ファシリテーターを中心に積極的に活用することができるようになった。各小集団に配付した「思考ツールカード」が効果を発揮したと言える。

これらの取組で気をつけなくてはならないのは、こうした活動自体が目的になってしまわないようにすることである。あくまでも多様な考えを引き出し、話し合いの論点を絞っていくということが目的であることを忘れないように実践を進めた。



図9 ブレインストーミング・KJ法

(2) p4cの取組

p4cとは「子どものための哲学 (philosophy for children)」のことで、本校では仙台の取組を参考にして授業に取り入れている。生徒と先生が車座に座り、コミュニティーボールという毛糸で作ったボールを回しながら対話を進める。「探究の対話」ともよばれており、生徒が主体的に探究する学習に適している学習形態である。



図10 p4cの様子

生徒主体の対話を進めながら、自分たちが立てた「問い」の解決に向かって対話を続けていく。生徒が最も好きになる学習形態の一つである。

(3) 思考ツールを活用した板書の工夫

道徳科の授業における板書にも思考ツールを多く活用し、生徒の考えを分かりやすく分類し、価値が高まるような話し合いを意図的に演出した。板書はあくまでも記録の一部と考え、生徒の意見を積極的に記入するよう校内研修会を通じて共通理解を図って指導を進めた。

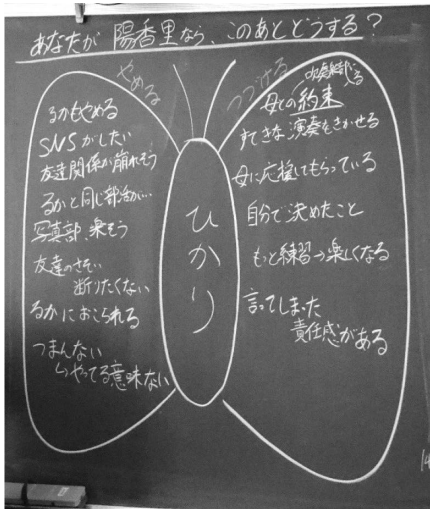


図11 バタフライチャート

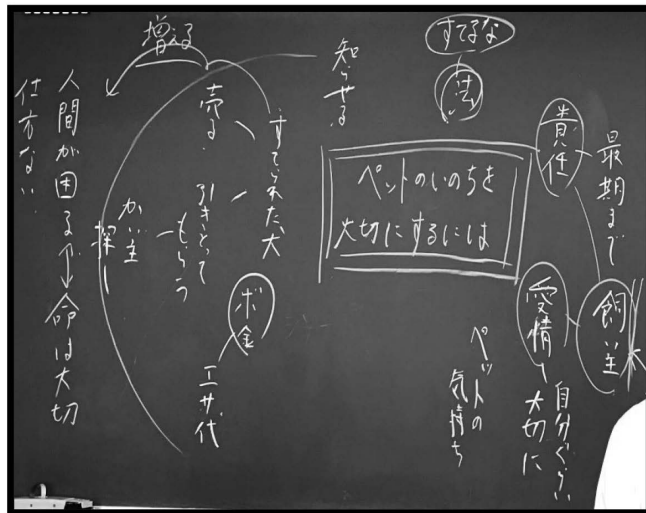


図12 イメージマップ

また、授業の記録を掲示物として毎時間作成し、生徒ともに授業の振り返りができるようにした。毎時間は大変なように感じるが、中学校には学年所属の副担任がいるので、学年で分担して作成を行った。教員自身がこうした掲示物をつくることは授業の振り返りともなり、授業改善への意識を高めることにもつながっていく。板書の仕方が以前までの道徳とは大きく変わってきていることは、教師自身が生徒の考えを大切にすることにつながり、「考え、議論する道徳」に授業を質的に変換していく重要なきっかけともなった。

6. 「いのち」の授業の実践～人的資源の積極的投入～

こうした道徳科の授業を「要」とした小単元構想の実践と授業改善とあわせて、本校の中期的な教育目標である『利他共生』を実現するために「いのち」の授業に積極的に取り組んだ。小単元の中に必ず位置付けるようにし、積極的に地域の人材をゲストティーチャー (GT) として投入した。授業に現実感を持たせ、多面的・多角的な議論を実現させるためである。授業改善のPDCAの中でサイクルを活性化させる大きな役割を持っている。カリキュラム・マネジメント推進の面からも大きな効果を期待している取組である。

(1) 道徳授業のゲストティーチャー (GT) とともに

道徳の授業でのゲストティーチャーとして活用する場合は、現代的な課題 (生命尊重、国際理解、差別、環境、LGBTなど) をテーマとした教材において積極的に授業に入っていた。その際にもっと重要なことは、ゲストに一時間を丸投げするのではなく、授業の中の生きた教材として活用するこ

とである。子どもたちの話合いが活性化するような生かし方がベストといえる。担任とGTがティーム・ティーチングを行い、子どもとともに一緒に考える授業でなくてはならない。図13のような生かし方を全教職員で研修も行い、GTの活用に関するスキルを高めた。特別の教員だけができるような取組では効果が薄いためである。

## (2) 小単元に関わる講演会の開催

講演会も小単元の中に位置づけ、さらなる実感を持った学びとなるような取組を実践した。単発の講演会だけでは、あまり効果がないが、テーマ性のある小単元の中で行うことで大きな効果が期待できる。

講師の生き様は、架空のものではなく実際の体験であり、実感のこもった話は生徒の心に大きく響き、自己や人間の生き方を考える上で大きな道標となる。

### ゲストティーチャーの生かし方

- ◆導入
  - ・1時間の学習を意欲的に進めるために、興味を引くような紹介を行う
  - ・ゲストの特色をつかませる
- ◆展開
  - ・体験談を中心に心情を語る一心を揺さぶる
  - ・子どもたちのイメージとは違うギャップを感じさせる場面を用意する
  - ・子どもたちの考え方に対する感想や意見を語る
- ◆終末
  - ・「生きる」ことにつながるようなメッセージ
  - ・1時間の授業を通しての子どもたちの成長や感想



図13 GTの授業の中での生かし方

## 7. 一枚ポートフォリオ評価の活用

小単元構想を中心とするPDCAサイクルの評価については、山梨大学の堀哲夫氏考案の一枚ポートフォリオをベースとした愛知県総合教育センターの一枚ポートフォリオ(図14)を活用した。このポートフォリオは、表面に学習前後の学習者の考えが記入できるようになっており、学習者自身がその成長をメタ認知的に確かめることができる構成になっている。また、裏面は小単元の中の各授業時間の振り返りを記入するようになっている。本校ではここに自己評価も書けるように改良をしている教員もいる。単元全体を通して、生徒自身が自分の成長や学習への取り組み方を振り返る際に効果を発揮している。また、書くことに抵抗を感じている生徒については、エピソード評価を併せて活用することで、ポートフォリオ評価のデメリットを補うこととした。

### ◆一枚ポートフォリオ評価 (OPP)

<p>道徳科「学びの振り返り」シート</p> <p>学習前の考えや思い</p> <p>学習後の考えや思い</p> <p>学習前と後の自分の考えや思いを読み比べて自分の成長を考えさせる</p>	<p>学習テーマ</p> <p>◆学習テーマ</p> <p>テーマ</p> <p>学年で決定</p> <p>◆家の人からのメッセージ</p> <p>保護者の思い</p> <p>◆先生からのメッセージ</p> <p>教師の願い</p> <p>年 組 番</p> <p>氏名 ( )</p>
---	---

<表面>

- ・道徳授業を4～6時間程度の小単元化し、テーマを設定する。
- ・学習前と学習後の考えを記入させ、学習後には、自分の成長を生徒自身にみとりをさせる。
- ・保護者や教師の願いや思いも生徒に伝える。

<p>【今日の教科名・行事名】</p> <p>二人の弟子</p> <p>○今日の授業・行事から学んだことを書きましょう。</p>	<p>【今日の教科名・行事名】</p> <p>月明りで見送った</p> <p>○今日の授業・行事から学んだことを書きましょう。</p>	<p>【今日の教科名・行事名】</p> <p>ライバル</p> <p>○今日の授業・行事から学んだことを書きましょう。</p>
<p>【今日の教科名・行事名】</p> <p>卒業文集最後の二行</p> <p>○今日の授業・行事から学んだことを書きましょう。</p>	<p>【今日の教科名・行事名】</p> <p>明かりの下の舞台</p> <p>○今日の授業・行事から学んだことを書きましょう。</p>	<p>【今日の教科名・行事名】</p> <p>一冊のノート</p> <p>○今日の授業・行事から学んだことを書きましょう。</p>

- ・道徳科の時間の振り返りを記入させる。生徒の「納得解」が示される。
- ・この数時間の振り返りの記述から生徒の道徳性の成長をみとる。

このポートフォリオと併せて副担任による「エピソード評価」も行う。

図14 一枚ポートフォリオ評価



### 8. 家庭・地域との連携と協働

学校のカリキュラム・マネジメントを進め、「社会に開かれた教育課程」を実施するためには、保護者や地域社会等との連携と協働が不可欠である。以下のような取組を行うことで、学校の中期的教育目標（重点目標）を共有し、教育活動への協力や支援を得て、その質の向上を目指すこととした。

- (1) 学校ホームページと週刊「校長室だより」による啓発
- (2) 「道徳通信」の発行
- (3) 保護者・地域向け道徳教育講座の開催（年数回）とG Tへの依頼
- (4) 読み聞かせやキャリア教育等に関わるボランティア活動
- (5) 全学級道徳授業の公開（年5回）と研究大会の保護者・地域への公開



図 15 校長による保護者向け道徳講座

### IV 考察・分析

先述したカリキュラムマネジメントチェックリストによるマネジメント全体の自己評価（4段階評価、対象は教職員 51名）の結果が図 16 である

評価が「3」以上をねらいがある程度達成されたと考えると、「組織構造」「組織文化」「教育行政」といった項目が十分とは言えないが、それ以外の今回ねらいとした項目についてはすべての項目である程度は達成されたと考えることができる。

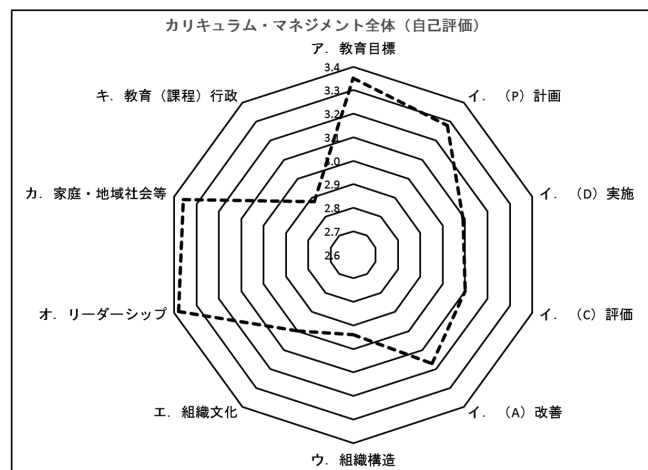


図 16 カリキュラム・マネジメント全体の自己評価

#### 1. 教育目標に沿った教科横断的なカリキュラム・マネジメントの推進

教育目標に対する自己評価（図 17）も 3 項目全てにおいて「3」を超えており、重点目標を重視した教育に対する教職員の意識が高いことが分かる。

学校全体としてテーマを設定し、それに沿って教科横断的な小単元を構想してきた結果である。

しかし、このグラフで分かるように、まだ管理職からのトップダウンで設定されたテーマであるので、生徒、保護者、地域等の実態をより反映したものにしていく必要がある。

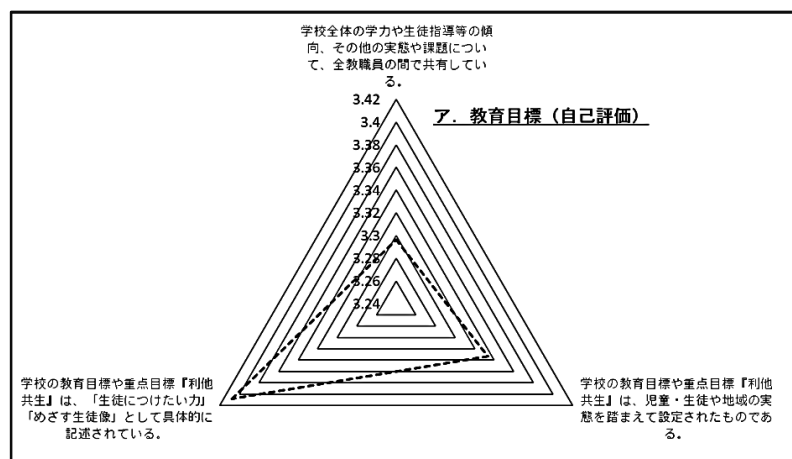


図 17 教育目標に対する自己評価

#### 2. PDCA サイクルの確立の視点からのカリキュラム・マネジメントの推進

表 1 が PDCA サイクルからの自己評価である。最も高い評価は、一枚ポートフォリオ評価が授業改善に大いに効果を発揮している点である。そして、目を引くのは P（計画）の段階におけるテーマへの意識や学年での小単元構想の計画性の高さである。それに比べると A（改善）に対する評価は低いものと

なっている。改善活動のさらなる工夫が必要であることが分かる。特に、学校全体の課題解決との関連性が薄いことが大きな課題の一つとして浮かび上がってきた。

しかし、全体としては道徳科を中心とした小単元構想にリンクした一枚ポートフォリオ評価が大きな効果を発揮したということが言える。

### 3. カリキュラム・マネジメントの推進による授業改善と「しなやかな道徳授業」の実現

授業改善への教職員の意識の高さについては先述の通りであるが、授業の中身自体はどう変わったかを判断するために生徒の自己評価から考察を試みる。表2は、p4c（子ども哲学）というファシリテーションを取り入れた授業と通常の授業との自己評価の違いである。これは一例ではあるが、生徒が主体的な探究をすることで、道徳的判断力や道徳的意欲や態度に大きな変化が見られた。

表2 p4cを活用した授業と通常の授業との自己評価比較（4段階評価）

自己評価の平均数値(4段階)	ハゲワシと少女		二つの提案(LGBT)	
	p4c的手法	通常	p4c的手法	通常
① 共感や感動することがあったか	3.5	3.2	3.4	3.2
② 深く考えることができたか	3.7	3.3	3.8	3.4
③ 自分のこれからの生き方に影響はあったか	3.8	3.2	3.6	3.1
④ 考えたことを大切にしていこうと思ったか	3.5	3.1	3.5	3.3
(調査人数)	(76人)	(143人)	(74人)	(140人)

### 4. 外部の人的資源の活用からのカリキュラム・マネジメント推進の土台作りの推進

表3を見て分かるように、GTの活用が、マネジメント推進の上で大きな効果をもたらしてきたことがよく分かる。道徳科の授業は、GTを活用しやすい教科であり、マネジメント推進の土台作としては最適である。

表3 地域・家庭との連携の自己評価

学校の教育の成果と課題を保護者・地域と共有し、共に解決策を考えたり行動したりする機会がある。(PTA、学校運営協議会、支える会等)	3.15
めざす教育活動のために、ボランティア等(読み聞かせ、外部指導員等)を積極的に利用している。	3.26
ゲストティーチャーや講師などの地域の人材や素材を積極的に活用している。	3.67

## V まとめと課題

本実践により、道徳科を要とする小単元構想が学校のカリキュラム・マネジメントを推進する上で大きな役割を果たし、教職員の意識を大きく変え、学校を大いに活性化していくであろうことが分かった。しかし、今回の実践で取組の弱かった「組織構造」「組織文化」「教育行政」に関わるマネジメントへのアプローチを今後の課題としてさらなるマネジメントの推進を図る必要がある。

### 注・文献

- 1) 田村知子 (2016) : 「カリキュラムマネジメント ハンドブック」(田村知子・村川雅弘・吉富芳正・西岡加名恵編著), ぎょうせい, 東京, 45-50.
- 2) 田村知子 (2016) : 「カリキュラムマネジメント ハンドブック」(田村知子・村川雅弘・吉富芳正・西岡加名恵編著), ぎょうせい, 東京, 36.
- 3) 赤堀博行 (2016) : 道徳教育におけるカリキュラム・マネジメントの基本的な考え方, 初等教育資料4月号, 58.

表1 PDCAサイクルに関する自己評価

イ。(P)計画	学校経営計画と学年や学級経営計画は、それぞれの目標や内容が連動するように計画されている。★学期ごとのテーマ「いのち」等	3.26
イ。(P)計画	道徳科の目標や小単元構想のカリキュラムが一目でわかるような教育課程表(全体計画や年間指導計画等)が作成されている。	3.3
イ。(P)計画	年度当初に道徳の教育課程を計画する際、評価規準や方法、時期などをも合わせて計画している。	3.3
イ。(D)実施	大方の教職員は、学校の教育目標や重点目標を意識して各教科や道徳の授業、行事等に取り組んでいる。	3.33
イ。(D)実施	大方の教職員は、道徳科の教育目標や内容の相互関連を意識して、日々の授業を行っている。	3.19
イ。(D)実施	大方の教職員は、他の内容項目(教材)や他学年で学ぶ内容との関連(系統性)を意識して指導している。	2.74
イ。(C)評価	大方の教職員は、道徳の授業改善に役立つような一枚ポートフォリオや記録(メモ)を残している。	3.41
イ。(C)評価	児童・生徒の学習成果の評価だけでなく、小単元構想や授業の評価も行なっている。	3
イ。(C)評価	学校として取り組んでいる授業研究が学校の課題解決に役立っているかについて評価している。	2.89
イ。(A)改善	道徳科の評価を、確実に次年度にむけた改善活動につなげている。	3.19
イ。(A)改善	一枚ポートフォリオやQ-U、道徳アンケート等の分析結果を参考に、学校全体や学年、学級の指導計画(内容の組織)を見直し改善している。	3.15
イ。(A)改善	一枚ポートフォリオやQ-U、道徳アンケート等の結果、学校や学年、学級全体の具体的な指導法を見直し改善している。	3.11
イ。(A)改善	大方の教職員は、学校の授業研究の成果を日常の授業に積極的に生かしている。	3.22